

大名家一門文書群の史料空間

—久保田藩苗字衆を例として—

鎌 田 奈菜子

【要 旨】

本稿は久保田藩苗字衆の各家に残る文書群を対象として、「史料空間」という作業概念を用いながら、文書群の特徴に鑑みて藩主・本藩下達文書と苗字衆によって共有された文書の作成授受の過程、およびその過程における「場」での機能について明らかにすることを目的としている。

大名家一門を対象とする研究は主に歴史学の分野で近年活発に行われている。しかし、史料学・アーカイブズ学の視点からの分析は目録の解題による概説的なものにとどまっており、先行研究の蓄積は未だ少ないのが現状である。そこで、久保田藩の大名家一門である苗字衆の各家に残る文書群を対象として、本藩から伝達された法令や苗字衆各家で共有された書状類の作成授受過程について考察を加えた。主に対象とした年代は、藩内が政治的・経済的に混乱し藩主交代が続いていた宝暦－明和期である。

考察の結果、藩の最高法令「御条目」の伝達における家臣団の行為や座列には身分秩序が顕著に現れており、家臣団の秩序の維持・強化として機能していたことが明らかになった。また、苗字衆家内部では本藩への何や評議を経て法令がより実務に即した形に転化し、家中・組下に共有された。そして苗字衆間で共有された文書の分析により、情報蓄積と文書授受には、藩主不在時には在所から久保田に出府し城下で藩政補佐を行う、という苗字衆独自の政治的役割が関係していることを述べた。

【目 次】

はじめに

1. 苗字衆各家の文書群の伝来と特徴

- (1) 久保田藩苗字衆の特徴
- (2) 文書群の伝来と特徴

2. 上意下達の伝達経路

- (1) 江戸における御条目の伝達過程
- (2) 国元における御条目の伝達過程
- (3) 苗字衆各家への伝達過程

3. 転化する法令—寛政7年郡奉行設置を例として

4. 苗字衆各家における文書伝達と共有化—石塚・今宮一件を例として

- (1) 「石塚・今宮一件」とは

（2）文書の授受

（3）情報の蓄積

おわりに

付表「宝暦-天明期における御条目一覧」

はじめに

本論文は久保田藩苗字衆の各家に残る文書群を対象として、「史料空間」¹⁾という作業概念を用いながら、文書群の特徴に鑑みて藩主・本藩下達文書と苗字衆による共有文書の作成授受の過程、および過程における「場」での機能について明らかにすることを目的としている。「史料空間」とは、史料が作成授受保管される「場」を基点に史料構造の理解を深めようとする概念である。「史料空間」は、文書が管理保管される物理的な「場」（存在空間）と、文書が複数の空間で共有され機能してゆく非物理的な「場」（認識空間）から構成される。本論文では後者の文書が共有され機能する非物理的な「場」を中心に検討する。

大名家一門を対象とする研究は、主に歴史学の分野で近年活発に行われている²⁾。しかし史料学・アーカイブズ学において、大名文書³⁾を対象とした検討は進みつつあるが大名家一門の文書群を対象とした先行研究の蓄積は少なく、藩士文書の存在にも目を向ける必要性が指摘されてきた⁴⁾。藩士家文書の中でも、上級家臣にあたる大名家一門の史料を対象とした先行研究には、山崎一郎氏による萩藩士文書の研究⁵⁾や林千寿氏による熊本藩家老松井家文書の研究⁶⁾などがある。大名家一門の文書群は全国の文書館などで収集、整理が行われており、研究に利用できる状態にある。しかし、大名家一門の史料群の分析は目録の解題による概説的なものにとどまっているのが現状である。

そこで本論文では、久保田藩苗字衆の各家の文書群を取り上げる。文書の作成授受過程と、文書が共有され機能した「場」について考察を加えたい。以下、第1節「苗字衆各家の文書群の伝来と特徴」では久保田藩苗字衆の5家と、このうち3家で作成受領蓄積された文書群について基本的な情報とその特徴をまとめる。第2節「上意下達の伝達経路」では文書の作成授受

1) 高木俊輔・渡辺浩一編『日本近世史料学研究』北海道大学刊行会、2000年。

2) 歴史学研究会近世史部会「近世後期における大名家・旗本家の家臣団からみた「家」意識」『歴史学研究』1028号、2022年。山口県地方史学会創立70周年記念シンポジウム「近世大名家臣「一門」への視座—近世武家社会研究への新たな試み—」（2024年10月6日最終閲覧）。

<http://www.ysflh.jp/taikai/index.html>

3) 福田千鶴氏は領主文書のうち①大名家の機能に関わって伝存した「大名家文書」、②藩庁の機能に関わって伝存した「藩庁文書」の両者を併せた文書群の総称として「大名文書」を用いている（福田千鶴「近世領主文書の伝来と構造」国文学研究資料館『アーカイブズの科学 下巻』柏書房、2003年）。

4) 山崎一郎「萩藩士家における「御判物・御証文」の保存と管理」国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2014年。

5) 山崎前掲論文。

6) 松井家文書の伝来について保存容器に着目して検討を加え、藩の家譜編纂事業との関連からその形成過程を明らかにした（林千寿「熊本藩家老松井家文書の成立過程」国文学研究資料館編『幕藩政アーカイブズの総合的研究』思文閣出版、2015年）。

過程と、文書が共有され機能した「場」について考察を加える。

その際中核に据えるのは宝暦-明和期（1751-1772）である。宝暦-明和期は、短期間の藩主交代、藩札発行事業の失敗、それに伴うお家騒動などにより領内が政治的・経済的に混乱していた。第3節「転化する法令」では、寛政期の地方支配体制の変更に関わる事例から、本藩から各家に「被仰渡」が伝達される過程で法令が転化していく様子を捉える。第4節「苗字衆各家における文書伝達と共有化」では、宝暦-明和期という危機の時代にあつての藩首脳部や苗字衆相互の、情報共有とその蓄積について明らかにする。

1. 苗字衆各家の文書群の伝来と特徴

本節では久保田藩苗字衆の特徴と、久保田藩苗字衆の各家を出所（fonds）とする各文書の伝来、整理状況および特徴について整理した。

（1）久保田藩苗字衆の特徴

本項では本論文を進めるにあたっての基本情報をまとめておく。久保田藩における苗字衆とは、佐竹姓を冠する藩主の親類大名のことを指す。苗字衆は藩の家格制において最上位の「一門」に位置していた⁷⁾。宝暦期の段階では、北家・東家・南家・西家・壱岐守家の5家が存在しており、壱岐守家は江戸在府の家で、図1「苗字衆・所預の配置図」の通り他の4家は久保田藩領内に居住している⁸⁾。また、5家の血縁関係は図2「藩主・苗字衆5家略系図」の通りである。



図1 苗字衆・所預の配置図
（『秋田県史第2巻近世篇上』を参考に作成）。



図2 藩主・苗字衆5家略系図
（『新編佐竹七家系図』を参考に作成）。

7) 久保田藩の家格は上から一門、引渡、廻座、一騎、駄輩、不肖、近進、近進並となっている。以上が士分で以下が足軽である（秋田県『秋田県史 第2巻 近世篇上』1964年）。

8) 式部家が存在していたが、佐竹義真が宗家を継承して6代藩主となったため寛延2年(1749)に途絶えている（金森正也『秋田藩小事典』無明舎出版、2018年）。

久保田藩苗字衆の特徴は3点ある。第1に、苗字衆は藩主の家臣であると同時に領主でもある点である。久保田藩は江戸時代を通して地方知行制を採用しており、苗字衆のうち北・南・西の3家は「所預」として知行地支配を行っていた⁹⁾。第2に、「所預」として与えられている領地（特にその城下）に本藩から派遣された本藩家臣（組下）が駐在する点である。第3に、藩の役職に就任しない点である。大名家の一門のなかには萩藩毛利家や鳥取藩池田家のように奉行や家老に就任する藩もあるが、久保田藩の場合、苗字衆は藩の役職に就くことはなかった。しかし、藩主不在の国元で緊急事態が発生した場合は在所から久保田へ登城し、藩政運営を補助していることから、久保田藩の苗字衆は官僚制の外部から藩政に参与する存在であったといえる。

こうした久保田藩苗字衆の特徴は、久保田藩苗字衆の各家の文書群のあり方が顕著に反映される。次項では苗字衆各家の文書群の特徴として、上意下達文書を多く含む点を確認していく。

（2）文書群の伝来と特徴

本項では、久保田藩苗字衆の各家に残されている文書群の伝来について、目録解題や秋田県公文書館研究紀要を参考に概観する¹⁰⁾。苗字衆は江戸在府の壱岐守家と、久保田領内の北家・東家・南家・西家の計5家が存在していたが、文書群が残っているのは、北家の「佐竹北家文書」、西家の「佐竹西家文書」、南家の「佐竹南家文書」である。東家と壱岐守家の文書群は現在確認されていない。

「佐竹北家文書」は、昭和27年（1952）に北家の第19代当主が秋田県立秋田図書館に北家伝来の資料855点を譲渡し、昭和32年に佐竹宗家の文書群である「佐竹文庫」と一括して整理された。史料の追加を経たのち、平成5年（1993）に図書館から公文書館に移管された。特徴は2点あり、第1に、「北家御日記」が全体の約6割を占めており、文書群の中核を成している点である¹¹⁾。「北家御日記」とは延宝2年（1674）から明治27年（1894）まで220年間の北家の公式記録であり、領内の行事や北家家臣団の人事、藩政の様子などさまざまな内容が記録されている。本論文では第2節以降で北家の動向を把握するために「北家御日記」を用いる。第2の特徴は、「北家御日記」を除くと江戸期の文書が多く、その中でも特に下達文書が多い点である¹²⁾。下達文書とは、本藩から北家へ下達された文書を指しており、目録では下達文書を様式によって御条目、執達、被仰渡、達書・触書の4項目に分類している。

「佐竹西家文書」は昭和26年に西家の23代当主が西家伝来の資料を寄贈し、秋田県立秋田図書館の所蔵となった¹³⁾。そして昭和32年に「佐竹北家文書」と同様に、佐竹宗家の「佐竹文庫」に

9) 領内の軍事的要所7か所（十二所・大館・檜山・角館・湯沢・横手・院内）に配置された一門および大身給人を指す。所領は、家中（本藩よりみれば陪臣）と本藩から派遣された旗本給人を指揮し、居住城下や一定地域の軍事・収納・民政を管轄していた（秋田県『秋田県史 第2巻 近世編上』1964年）。

10) 秋田県公文書館『佐竹北家文書・佐竹西家文書目録（秋田藩関係文書Ⅲ）』2012年。

11) 総数1306点の編成は、江戸期の史料が461点（35.2%）、戊辰・明治期の史料が17点（1.3%）北家御日記とその抜書が828点（63.4%）となっている。

12) サブフォンド「江戸期」の文書数461点におけるシリーズ別内訳は、下達文書が209点（45.3%）、書状が68点（14.8%）、上申文書が60点（13%）、記録類が33点（7.2%）、知行地関係が29点（6.3%）、系図・由緒書が19点（4.1%）、起請文が6点（1.3%）、その他37点（8%）となっている。

13) 秋田県公文書館所蔵の資料のほかに、大館郷土博物館に佐竹西家から永久寄託された資料があり、

含まれる形で目録が作成された。平成5年には公文書館開館に伴って図書館から移管された。「佐竹西家文書」も「佐竹北家文書」と同様に、下達文書が比較的多く含まれているという特徴がある。加えて、藩主から西家に充てられた書状である藩主直書も、江戸期の文書総数の約2割を占めている¹⁴⁾。

「佐竹南家文書」は、正式な文書群名は「出羽国雄勝郡湯沢佐竹南家文書」である。本文書群は昭和23年度に原蔵者より文部省史料館に譲渡され、現在は国文学研究資料館が所蔵している。譲渡後に再整理と目録編成が行われ、『出羽国雄勝郡佐竹南家文書・佐竹南家分家早川家文書目録』が刊行されている¹⁵⁾。目録の解題によると、書状形式の資料が極めて多い点が特徴として挙げられている。また、藩主不在の国元において、苗字衆の判断が求められるような事件が生じた際に国元の苗字衆4家が情報共有をしていた書状も多数残されていることが分かる。

佐竹南家に伝来する関連資料としては秋田県湯沢市所蔵の「佐竹南家御日記」がある。「佐竹南家御日記」は天和2年（1682）から慶応4年（1868）まで佐竹南家御用座で記された公的記録である¹⁶⁾。本論文では第2節以降で南家の動向を把握するために「佐竹南家御日記」を用いる。

このように、「佐竹北家文書」、「佐竹西家文書」からは藩主あるいは本藩から苗字衆への上意下達の経緯とその機能を、「佐竹南家文書」からは苗字衆内部での情報共有の様相を抽出できる。これらの各文書群の特徴を生かして、第2節以降では藩主と苗字衆の関係において、文書が作成・授受された空間について具体的な事例に即して明らかにしてゆく。

2. 上意下達の伝達経路

本節では、佐竹北家文書と佐竹西家文書に残る文書、および19世紀初頭に久保田藩が編纂した部類記録集『国典類抄』を主に用いて、苗字衆の家中・組下レベルまでを射程圏内として本藩、藩主からの上意下達の伝達経路について明らかにする。対象とする時期は明和期を中心として、『国典類抄』に記述がある宝暦-天明期とする。

久保田藩の法令伝達に関する先行研究には、「佐竹北家文書」・「佐竹西家文書」に含まれる御条目の内容を分析した佐藤隆氏の研究¹⁷⁾や、「町触控」¹⁸⁾に含まれる御条目・家来触・町触を分析対象とし、渡所と伝達経路に着目して検討した高橋務氏¹⁹⁾、町触の伝達方法を明らかにした齊

主に明治期以降の書状類とモノ資料が含まれている。

14) サブフォンド「江戸期」の文書数754点におけるシリーズ別内訳は、下達文書が158点（21%）、藩主直書が153点（20.3%）、書状が109点（14.5%）、系図・由緒書が93点（12.3%）、上申文書が41点（5.4%）となっている。

15) 「佐竹南家分家早川家文書」は「佐竹南家文書」に含まれていたが、文書群を発生させた組織体の観点から、佐竹南家の分家である早川家の文書群として再編成された（学術資料事業部『出羽国雄勝郡湯沢佐竹南家・佐竹南家分家早川家文書目録（その1）』国文学研究資料館、2022年）。

16) 湯沢市「湯沢市の文化財」（湯沢市 Web サイト）2024年8月17日最終閲覧。https://www.city-yuzawa.jp/site/bunkazai/2068.html。

17) 佐藤隆「佐竹北家文書・佐竹西家文書について」『秋田県公文書館研究紀要』第18号、2012年。

18) 明和7（1770）年から明治2（1869）年までに発布された法令を収録した全30巻の史料。一部が翻刻され『秋田藩町触集』として刊行されている（今村義孝・高橋秀夫『秋田藩町触集 上』未来社、1971年）。

19) 高橋務「町触控」に関する基礎的一考察—寛政期における藩法令の基礎的問題を中心に—『秋田地方史論集』みしま書房、1981年。

藤志帆子氏の研究²⁰⁾がある。しかし、これらの先行研究では江戸藩邸（主として上屋敷）における法令伝達については触れられていない。また、分析は法令が本藩から各宛所へ伝達されるまでの段階にとどまっており、各宛所に伝達された後の経過については明らかになっていない。

そこで本節では、江戸藩邸および国元において上意下達文書がどのような場でどのように伝達あるいは交付されたのかについて、御条目を例として考察する。

（1）江戸における御条目の伝達過程

本項では、明和元年（1764）10月21日に発せられた、儉約に関する御条目を例として、江戸藩邸における御条目の伝達方法を明らかにする。当時の藩主は第8代佐竹義敦で、国入り前のため江戸藩邸に居住していた²¹⁾。したがって、御条目は在府中の家臣に対して江戸藩邸で伝えられた。国元では約1か月後の11月17日に久保田城で御条目が伝達された。本条目は「佐竹北家文書」と「佐竹西家文書」に御条目と別紙覚の写しが残されている²²⁾。また、『国典類抄』と佐竹南家の日記にも伝達に関する記述が残されており、江戸・国元・苗字衆在所での伝達過程が明らかになるため、事例として取り上げる。

ところで、藩の重要法令である御条目の構成について金森正也氏は、藩主の意思を表明した「御条目」、それを家老が通達した「執達」、法令の具体的内容を記した「別紙（覚）」の3文書から構成されることを明らかにしている²³⁾。また、「御条目」は「御自筆御書付」・「上意御書付」・「御直筆」等と呼称されることがあるが、藩の危機的状況において藩主の意思を表明し、政策を家臣へ下達するという内容においては共通していると高橋務氏は述べている²⁴⁾。

このうち、御条目と執達、別紙が「佐竹北家文書」と「佐竹西家文書」には多く含まれている。以下、御条目の伝達方法について出席者、伝達方法の2点について考えたい。

第1は出席者についてである。『国典類抄』に収録されている「茂孟御目付勤中日記」の記述によれば、江戸藩邸の「御座之間」で藩主列席のうえ、国元から江戸出府中の北家当主の主計義邦、江戸詰家老の九郎兵衛（大塚九郎兵衛資永）も列席し、「近進並」以上の家臣に対して、御条目が言い渡されたことが分かる²⁵⁾。なお、近進並とは久保田藩の家格の一つで、武士身分の最下層に位置する臨時登用の者を指しており、江戸藩邸に勤める全ての武士身分の者が出席したことが分かる²⁶⁾。また、同日の佐竹北家御日記の記述を確認すれば、

一御夕御膳後御座ノ間 御出座定居・詰方共ニ給分無滞相列シ、先日拙者共へ被相渡候御書附両通御祐筆芳賀喜助読之、畢而被為入候、次ニ御広坐敷へ何も相詰、拙者・九郎兵

20) 齊藤志帆子「秋田藩における「町触」の伝達について」『秋大史学』64号、2018年。

21) 寛延元年(1748)に江戸藩邸で佐竹義明の長子として生まれる。義明の死去に伴い宝暦8(1758)年より藩主に就任。天明5(1785)年没（ジャパンナレッジ版『国史大辞典』）。

22) 「佐竹西家文書」にAO342-4-2「御条目」・AO342-4-1「別紙覚」が、「佐竹北家文書」にAK342-27「別紙覚」が残されている。

23) 金森正也『藩政改革と地域社会—秋田藩の「寛政」と「天保」—』清文堂出版、2011年。

24) 高橋前掲論文。

25) 「今日 御出座之上被 仰出候趣有之二付、ハツ時より可相詰段昨日被 仰渡、御座之間江相詰、御出座之上 御条目を以左之通被 仰出候、主計殿・九郎兵衛殿御列席、近進並以上之面、江被 仰渡候、（中略）右式通 御条目御出座之上於御座之間芳賀喜助（御右筆筆頭）江九郎兵衛殿御渡、同人読之（後略）」（『国典類抄』第19巻「後編雑部9 於江戸被 仰渡」16-18頁）。

26) 秋田県『秋田県史 第2巻 近世編上』1964年。

衛列シ、右御書附被指出候趣ニ准シ候御書附滑川武右衛門（副役）読之、畢而退出、とあり、江戸藩邸の江戸定府・勤番を問わずあらゆる武士身分の者を対象に御条目が伝達されていたことが分かる。

第2に伝達方法についてである。国元での伝達方法を扱った高橋氏・金森氏の先行研究では年代によって多少異なる分析がなされているが、特徴をまとめると以下ようになる。

- ①家老から御条目による下命がある旨が告げられる。
- ②家老から右筆筆頭が御条目を受け取り、読み上げる。
- ③藩主が退出する。
- ④家老から副役が執達を受け取り、読み上げる。
- ⑤家老・苗字衆らが退出する。
- ⑥役前の奉行と副役から各職へ別紙（覚）が交付され、散会となる。

明和元年10月21日の御条目も、先行研究で明らかにされている上記の過程に沿って伝達が行われていることが分かる。本事例で着目すべき点は、藩主列席の「御座之間」で右筆筆頭が御条目を読み上げた後、出席者は「御広座敷」へと場所を移し、副役による執達の読み上げが行われている点である。

宝暦-天明期において江戸で発せられた御条目を付表に整理したところ、藩主が出座のうえ仰せ渡す御条目は「御座之間」で伝達され、国元で仰せ渡しがあった御条目は「御広座敷」で伝達されていることが明らかになった。久保田藩の政治空間に関わる先行研究は現時点では確認できておらず、特に江戸藩邸の内部構造は不明な点も多い。しかし、法令伝達の面において、「御座之間」は藩主が意思表示を行う藩主の政治空間であったといえる。「御座之間」で藩主列席のもと御条目の読み上げがあったわけである。一方、家老が作成した執達を副役が読み上げる際には出席者に対して「御広座敷」への空間上の移動を求めている。このことから、法令の格式および出席者の身分に応じて伝達の方が定められていると推測できる。

（2）国元における御条目の伝達過程

本項では、第1項で扱った御条目がいかにして国元の家臣や町方へ伝達されたのかについて検討する。以下の史料は、『国典類抄』に収められている「石井忠運日記」の明和元年11月17日条の記述である。当日の出席者や伝達の作法が詳細に記述されている。

一於大広間ニ 御条目を以て被 仰渡有之候、将監殿・年寄中御登 城、能代奉行・三奉行・御副役・御側廻登城、河内殿始御座辺の面々并諸頭役壱町より兩人宛御呼出、江戸表より被 仰出候趣 御条目を以被 仰渡候段源左衛門殿御演説、御右筆筆頭田中左内読之、右に付御年寄中執達書被指添被 仰渡候段御演説に而 御条目・御別昏并御執達共都合三通宛御座辺之面、江源左衛門殿被相渡候、畢て諸頭役より以下へ役前兩人右三通宛相渡、 上使仙北江梅津永五郎、下筋江生田目惣内被指越候、横手御物頭江は宿継を以 御条目被指越候、源左衛門殿被仰候は執達書前々御添役読候哉之義大小姓番頭江被仰含、御記録御吟味被成候処、先年御用達役菅生理右衛門読候義相見得候、其已後共御副役読候義不相見得候、依て不被為読置候ても可然哉、若又被為読候は、御座辺之面々退出已後御年寄中も御引取以後に読被仰渡候而可然哉と被仰候に付、幸ひ御会所一方共詰合候故、右之趣遂評議候所、御右筆筆頭 御条目読候跡にて御執達書御副役読候事い

か、敷事二有之候、況御年寄中・御座辺の衆御引取以後諸士へ斗読被 仰渡候事には在之間敷候、兎角古来の通御執達は不被為読置、御演説斗二而被相添被渡置可然事二奉存候段申上、其通に向後共可被成由にて御副役は御執達書読不申候

御条目左之通（後略）

第1に出席者についてである。東家の佐竹将監義路、北家の佐竹河内義躬、国元家老、能代奉行、三奉行、副役、側廻、侍町の代表者2名が列席していることが分かる。「三奉行」とは、町奉行・本方奉行・勘定奉行を指しており、副役と共に会所での合議に当たる表方の中核を成す役職である²⁷⁾。江戸藩邸で御条目が伝達された時とは異なり、国元では藩の中心的役職に就く者が列席している。また、付表の通り国元では宝暦-天明期を通じて城下の侍町への伝達を担う者が招集されている点に特徴がみられる。

伝達方法については、御条目を右筆筆頭が読み上げ、執達を副役が読み上げ、各職宛に御条目・執達・別紙（覚）の3点が交付される点は先行研究の通りである。本史料で特徴的な点は、伝達方法の変更が検討されている点である。

本御条目を機に伝達方法を変更しようとしたが家老や苗字衆に配慮した結果、伝達方法の変更は行われなかったことが傍線部から分かる。すなわち、副役が執達を読み上げるべき否かについて、前例を踏まえて御会所一方²⁸⁾と相談した結果、「御右筆筆頭 御条目読候跡にて御執達書御副役読候事いか、敷事二有之候、況御年寄中・御座辺の衆御引取以後諸士へ斗読被仰渡候事には在之間敷」として、従来通り家老が演説することをもって御条目等3点を渡すことに決まった。つまり、御条目の伝達方法は先例に基づいて決定されているが、場合によっては変更を検討することもあった。

明和元年の事例では結果として変更には至らなかったが、付表の通り安永・天明期に入ると出席者から右筆筆頭が消え、代わりに側方の御刀番が御条目を読み上げている事例が複数確認できる。安永・天明期の変更理由は定かではないが明和元年の事例から類推するに、伝達方法の変更は家老や苗字衆などの上位の家格にある者への身分的な配慮が背景にあると考えられる。

また、伝達の場合についていえば、付表で国元の事例を見ると「御広間」と「大盤若之間」の2か所に分けて御条目の伝達が行われた事例がある。「御広間」では苗字衆から引渡・回座までの家臣に対して御用番家老から御書付が渡され、「大盤若之間」では諸士・町方の者に対して役前の奉行から御書付が渡される。国元の伝達においても江戸藩邸と同様に、伝達の空間は行為者・出席者の身分に応じた格差が設定されていることが分かる。このように、御条目伝達における行為には家臣団の身分秩序が顕著に現れており、家臣団の秩序の維持・藩主権威の強化として機能していたことが窺える。

27) 表方とは、一般政務で政庁に勤務し、家老支配のうち藩政一般・財政・民政等に関連する役方の中心である（『秋田県史第2巻近世編上』秋田県、1977年）。これに対して、城中で藩主の補佐・政務の取次や伝達に関わる職を側方、城中・城下・江戸屋敷の警衛にあたる職を番方と呼ぶ。（木村礎ほか編『藩史大辞典第1巻北海道・東北編』雄山閣出版、1988年）。側方には御膳番、御刀番、御用人、目付等が属している（『秋田県史第2巻近世編上』秋田県、1977年）。

28) 会所で合議をし、政治を執り行っていた三奉行を指す（森朋久『近世中後期藩財務役人の研究—佐竹秋田藩・内藤藩を対象として—』巖南堂書店、2003年）。

（3）苗字衆各家への伝達過程

本項では、領内に散らばる苗字衆や大身給人への法令伝達について触れておきたい。明和元年11月17日の御条目は仙北には梅津永五郎、下筋には生田目惣内が上使として遣わされ、横手には宿継をもって御条目が伝達された。梅津・生田目の明和元年時点での役職は定かではないが、本藩から苗字衆や大身給人への伝達は側方の職掌であるため、梅津・生田目の両人も側方の役人であると考えられる。

仙北とは領内の南部3郡、下筋とは領内の北部3郡を指しており、御条目は領内全域に伝達されたことが分かる。その痕跡として佐竹北家と佐竹西家に明和元年11月17日の御条目と別紙（覚）が残されており、西家の「別紙（覚）」の包紙には「明和元年甲十一月廿一日 上使生田目惣内」とある²⁹⁾。

また、『佐竹南家御日記』にも、本御条目が上使を以て本藩から伝達された旨が記録されている。日記の記述によれば、御条目は上使によって苗字衆の各家へ伝達された後、佐竹南家の家政をつかさどる御用座で写が作成された³⁰⁾。そして組下から1町につき2人ずつ南家屋敷へ参上させ、御条目・執達・別紙覚の写しを受け取らせることで組下レベルまで御条目が伝達され、家中にも同様の方法で伝達がなされた³¹⁾。

苗字衆や大身給人のもとへ到着した後の上使の動きについても『佐竹南家御日記』に記述が残っているので参照したい。以下は、宝暦4年10月11日に久保田で発せられた銀札遣い開始の御条目に関する、同年10月15日の日記の記述である。

一上使田中甚一郎着、則生田目源右衛門宿見舞、旁申合罷帰候、九時半時分御玄関より罷出、御広間西之縁に着座、毎度之通手前共罷出、辛勞之段申演候、御料理御酒被下、終而御前ニ而被為出御意有之、其後御席江入 上使御書付之赴申上、御書付直々御前江指上候、其後本席退出之節 御前ニ而少シク御立被遊候、拙者共御広間御縁之外杉戸のかけ迄罷出候、上使御書付之趣は御領内融通ため江戸表へ御窺相済、当戌之年より来亥ノ年迄式十五年御領中銀札遣被成置候段被 仰渡候、具御書付ニ有之

これによれば、上使は宿に到着後、南家役人の宿見舞を受ける。そして申し合わせののち南家屋敷を訪れ「辛勞の段」の労いとして料理や酒のもてなしを受ける。その後当主（佐竹義舒）と対面し、御条目の内容を申し上げ、御条目を当主に直接手渡している。御条目を受け取った各家では、了承の意を表すため「御請之御使者」を久保田に派遣している。御請の使者の派遣に加えて、上使に「毎度之通」料理と酒の接待を行っていた背景として、上使が藩の最重要法令である御条目伝達のために派遣された使者である、という点が考えられる。御条目の伝達は、本藩（藩主）・苗字衆双方にとって本藩（藩主）への忠誠を確認する機会としても機能していたのではないか。

29) 前掲註22。

30) 「一昨廿日上使梅津半五郎御条目を以申上、御承知被遊右御条目三遍為写候而、御与下御家中共ニ被仰渡候」（『佐竹南家御日記』明和元年10月21日条）。

31) 「一御上使を以御条目之趣与下・御家中へ被仰渡候所、右御受御与下ハ壱町より兩人宛罷出御受申上候、御家中より御受申上候」（『佐竹南家御日記』明和元年10月23日条）。

3. 転化する法令—寛政7年郡奉行設置を例として

本節では、本藩から苗字衆各家の家中・組下へまで伝達された御条目と対比して、本藩から各家へ伝達が進むにつれて法令の機能が変化する事例を紹介する。事例として、寛政7年（1795）の郡奉行設置に関わる「被仰渡」とそれに伴う佐竹北家・本藩の動向を取り上げる。

郡奉行とは、郡村地域一般の民政・収納・警察を管掌した久保田藩の職である。9代藩主佐竹義和による寛政改革の中心的位置を占め、寛政7年に再設置された。金森正也氏によれば、郡奉行再設置によって従来所預が担ってきた郷村支配の権限の大部分が郡奉行に委譲され、郡奉行再設置は給人統制の意図をもってなされたとされる³²⁾。

藩は寛政7年9月14日に「被仰渡」を以て郡奉行再設置を領内一統に周知した。派遣される郡奉行の職掌や従来支配を担ってきた所預との兼ね合いなどの具体的な内容は示されていないが、郡奉行再設置という藩の方針を示した法令である。なお、渡所として8名の名前が記載されており、これらはすべて所預である³³⁾。

この「被仰渡」は、屋敷番を経由して9月16日に北家（角館）に伝達されたことが「佐竹北家御日記」の記述から明らかになった³⁴⁾。屋敷番とは、所預の久保田城下屋敷に駐在する家臣であり、藩の家老や行政機関と在所の所預を繋ぐ役割を果たしていた³⁵⁾。

この「被仰渡」を受信した北家では、翌17日、22日、27日の3回に渡って本藩の御膳番所へ伺いを立てている³⁶⁾。その内容は、今まで北家が行っていた鳥獣の吟味、境目口番所の取扱、捕縛した者の預置・引渡しに関する伺等である。御膳番所とは、御膳番が詰めている役所を指すと考えられる。御膳番は側方に含まれ、藩主の奥向き・台所などを指揮監督する職である。また、他領との文書伝達は側方全体の職務であったため、北家は本藩の御膳番宛に伺書を提出していると考えられる。これらの伺書に対する本藩からの返答は、久保田城下の屋敷番が北家の在所へもたらした。

一今日家中・与下へ申渡候趣左ニ

覚

今般郡奉行被相建郡村之義悉支配被仰付候旨ハ此間申渡候通ニ候、右之通ニ候得ハ在々へ罷越候節、百性慮外致候者有之候ハ、其村承届、右村之肝煎方へ申断訴申出候得ハ於此方其次第郡奉行へ申断候

但慮外致候者村不相名乗候ハ、其場所最寄之肝煎へ預置候而訴可申出候、右之趣何も相心得在々へ罷越候節ハ分限相応之供人召連候而可罷越候

32) 金森前掲書。

33) 佐竹主計（角館）、佐竹石見（湯沢）、佐竹左衛門（大館）、戸村十太夫（横手）、大山十郎（院内）、多賀谷菊太郎（檜山）、茂木若狭（十二所）、梅津小右衛門（十二所か）（今村義孝・高橋秀夫編『秋田藩町触集（中）』未来社、1972年）。

34) 久保田城下の屋敷番より北家に伝達された用書が「当十四日於御用処小田内又左衛門を以被渡候書附」として日記に記載されている。書附の内容は寛政7年9月14日の被仰渡である（「北家御日記」寛政7年9月16日条）。

35) 高橋前掲論文。久保田城下に屋敷を所持していたことが城下絵図（秋田県立博物館所蔵）から分かるのは、東家、北家、西家、南家、戸村氏、多賀谷氏である。所預の大半が久保田城下に屋敷を構えており、その屋敷番を通して在所へ法令が伝わったと推測できる。

36) 「北家御日記」寛政7年9月17日、22日、27日条。

そして、これらの本藩への伺や北家の家老合議を経て、北家の家中と組下へ上記のような「覚」が共有された³⁷⁾。「覚」では不躰な振る舞いをする「慮外致候者」がいた際の取扱について、肝煎・郡奉行へ訴え出ることが定められた。

また、「佐竹北家文書」には本件に関係して、個別地域の支配権限や横死者の処置、罪人の捕縛について、当主である佐竹主計義躬が作成した伺書が残されており、付札で本藩からの回答が示されている³⁸⁾。伺書の内容は、街道や橋、川などの支配領域について、横死の者や喧嘩した者の捕縛について、北家から本藩へ指示を仰ぐものである。

そして、本藩に残されている「御所預より懸合之儀被仰渡之事」という史料が、この伺書に関連する「被仰渡」であると推測される。本史料は「御用留書」という史料の一部である³⁹⁾。「御用留書」は郡奉行設置に関する諸法令を、寛政7年から11年にわたって郡方吟味役が筆録したものである⁴⁰⁾。その一部である「御所預より懸合之儀被仰渡之事」は、取り逃がした罪人の捕縛や倒死・横死者発生時の検使派遣について、所預と代官の管轄を確認する内容の仰せ渡しである。この2つの史料から、従来在方の支配を行ってきた所預と新たな郡奉行による支配の兼ね合いを確認する伺書が所預より出され、その伺書を受けて本藩では所預と郡奉行の管轄に関する「被仰渡」を作成し周知を図ったと考えられる。

このように、北家では「被仰渡」を受けて本藩に不明点について「伺」を出し、本藩からの回答を踏まえて「被仰渡」に情報を付加し、領内で通用する「覚」へと転化（再構築）させていったと考えられる。郡奉行設置を告知する「被仰渡」の写が「佐竹西家文書」や「佐竹北家文書」に残されていることから、転化する以前の法令も苗字衆各家の家中・組下に共有されたことも推察できる。

加えて、「御所預より懸合之儀被仰渡之事」の史料に見られるように、本藩でも所預からの伺を経て法令をより具体的なものに再構築し、所預や郡奉行・代官へと伝達していたことが検討により明らかになった。

4. 苗字衆各家における文書伝達と共有化—石塚・今宮一件を例として

本節では、前節で本藩から苗字衆へ文書が伝達された過程を検討したことを前提に、その後各家で文書はどのように蓄積され情報として利用されたのか、明らかにする。

事例として、明和元（1764）年9月に起こった「今宮大学・石塚市正御科之一件」（以下、石塚・今宮一件とする）。を取り上げ、苗字衆各家における文書授受と情報蓄積の過程について考察する。主に用いる史料は「佐竹南家文書」・「佐竹西家文書」に含まれる書状である。

(1) 「石塚・今宮一件」とは

石塚・今宮一件とは、明和元年9月時点で江戸詰家老であった石塚市正義陳と今宮大学義榮

37) 「北家御日記」寛政7年9月29日条。

38) AK312-63「佐竹義躬伺書」（寛政7年10月）。

39) 秋田県庁旧蔵古文書 史料番号県A-138「御用留書」（寛政7年）。

40) 金森正也「史料紹介「寛政七卯年より同十一巳年迄 御用留書」—寛政七年の郡奉行設置—」『秋田県公文書館研究紀要』第16号、2010年。

が「御役形勤方不宜」を理由に遠慮に処され、国元の久保田に帰国ののち生涯蟄居と知行高3分の1の召上を命じられた出来事である。

本一件の特徴は2点ある。第1に、本一件に際して国元の苗字衆が在所から久保田城下に出府していた点である。元々久保田城下に居住している東家当主の佐竹山城義智に加えて、南家当主の佐竹兵馬義以と西家当主の佐竹大和義村が久保田に集まり、一時期最大で3家の苗字衆が城下で藩政運営に関わっていた。

第2に、以前より藩主不在の国元で藩政の中心となっていた北家当主の佐竹主計義邦が、東家次男の佐竹将監義路と共に江戸藩邸へ出府しており、苗字衆が江戸藩邸と国元に分散していた点である。そのため、江戸藩邸と国元の間では藩家老が交わす御用状に加えて、苗字衆の書状が授受されていた。

このように、石塚・今宮一件では江戸藩邸と国元、久保田と在所の苗字衆が情報を交わしており、本一件を事例として苗字衆間での情報伝達の過程を明らかにすることができる。さらに「佐竹南家文書」には本一件について、南家が他苗字衆とやりとりをした書状がまとまって残されている。このような本一件の特徴を生かして、苗字衆各家間の情報伝達の過程と、各家に共有された情報が、各家でどのように蓄積されたのか明らかにする。

（2）文書の授受

本項では、苗字衆間の情報伝達の経路について「佐竹南家文書」に含まれる史料を用いて明らかにする。「佐竹南家文書」の目録では小項目「石塚市正・今宮大学一件」が立てられ、関連する書状類85点が含まれている⁴¹⁾。

「石塚市正・今宮大学一件」の小項目に含まれる史料番号22K526-1～5の主な内容は、石塚・今宮一件に関して、東家の佐竹山城義智・佐竹将監義路、西家の佐竹大和義村から南家の佐竹兵馬義以に宛てた書状の写である。本項ではこの5点一括史料の中から、特に他苗字衆との文書授受の様子が明らかになる史料を紹介する。

史料番号22K526-1「佐竹山城殿同将監殿より宿継ニ而申来候御用書載書」は、東家の佐竹山城・将監から佐竹兵馬に宛てた書状の写で構成される。本史料に含まれる書状は以下の7点である。

- ①小場源左衛門（本藩家老）から佐竹兵馬に宛てた御用状の写。
- ②佐竹山城・将監から佐竹兵馬に宛てた書状の写。
- ③佐竹山城・将監から佐竹兵馬に宛てた書状の写（江戸の佐竹主計から国元の佐竹山城・将監に届いた書状2点を添付）。
 - 1 佐竹主計から佐竹山城・将監に宛てた書状の写。
 - 2 佐竹主計の口上書の写。
- ④藩主の「御自筆御書付」の写。
- ⑤石塚市正の罪科申渡書の写。
- ⑥今宮大学の罪科申渡書の写。

41) 学術資料事業部『出羽国雄勝郡湯沢佐竹南家・佐竹南家分家早川家文書目録（その2）』国文学研究資料館、2024年。

⑦佐竹山城から本藩家老に宛てた書状の写。

本史料の特徴は2点ある。第1に、この一連の書状は本藩家老による宿継をもって東家から南家に伝達され、返答も本藩家老を通して東家へ伝達されている点である。①の本藩家老から佐竹兵馬に宛てた御用状写の全文は以下の通りである。

以宿継一筆致啓達候、貴殿江佐竹山城・佐竹将監々急段被申達候御用有之旨被申聞候、仍
右御用状指越候間、左様御心得可被成候、御用番故、拙者以一名如斯御座候、恐々謹言
小場源左衛門
十一月廿七日 峯昌（花押）
佐竹兵馬殿

家老から南家に宛てた御用状に関して、別時期ではあるが①とほぼ同形式の家老御用状が「佐竹南家文書」に残されており、月番（御用番）家老が苗字衆の文書を伝達する役割を担っていたと考えられる⁴²⁾。加えて、本史料22K526-1の裏表紙には「明和元年申十一月廿九日朝五時至着、為立晦日御返簡久保田へ被遣候、小場源左衛門月番故、同人江遣候」とあり、東家への返答も本藩の月番家老を経由していたことが分かる。

第2の特徴は、江戸出府中の北家と久保田城下の東家の間で授受された書状の写が南家宛の書状に添えられている点である。③の末尾には「右之通主計々御用状・猶指控申上候口上書共ニ写ヲ以入御説之落字等可有之間、宜御斟酌・御見解被下度候、尤御披見之上御返可成候」とあり、江戸の佐竹主計（北家当主・義邦）から国元の佐竹山城・将監（東家）に届いた書状を南家へ共有し、見解を尋ねていることが分かる。

なお西家には、「佐竹西家文書」に史料番号 AO312-88「主計より御用状写并指控口上書写」があり、東家の佐竹山城・将監から西家の佐竹大和に宛てた書状が写し取られている。先に紹介した南家の史料22K526-1と同様に、江戸の佐竹主計から国元の佐竹山城・将監に届いた書状2点が西家宛の書状に添付されており、この2点は南家宛の書状に添付されているものと全くの同文である。

つまり、南家や西家のように久保田城下に一時的に出府したのち在所へ戻った苗字衆に対しは、城下の東家が情報伝達の結節点としての役割を担っていたのである。江戸詰家老や江戸出府中の北家からの御用状は、飛脚を通じて城下の久保田に伝達されていた。そのため、久保田城下に定住して国元や江戸の情報を集めやすい東家が、その特徴を生かして他家への伝達を担っていたと考えられる。

続けて、江戸出府中の北家当主佐竹主計義邦と国元の苗字衆の間で交わされた書状についても分析したい。佐竹主計が江戸滞在中の「北家御日記」に

一御殿ニ居候内去月廿九日秋田出立之御飛脚到着申候、九郎兵衛今日も病氣出勤不申候故、状箱物書ニ為開候、御用状共も披見不申、物書を以九郎兵衛へ遣候

という記述がある⁴³⁾。その直後に「秋田より達書状」10通が列記されており、10通の内訳は、国元からの御用状と、国元の苗字衆や家族（妻と子の河内）から主計個人に宛てた書状である。傍線部の通り、江戸詰家老の大塚九郎兵衛資永が不在のため、主計が状箱を開けることはせず

42) 佐竹南家文書 史料番号22K735「佐竹兵馬宛小野岡義蕃御用状」。

43) 「北家御日記」明和元年11月8日条。

に物書に開けさせている。そして、状箱の中の御用状等を見ることなく物書を通して大塚へ渡している。

これらの南家・北家の事例から、苗字衆同士での書状の授受においては、江戸・国元の区別なく家老が仲介していたことが分かる。この背景として、藩主不在の国元における苗字衆の専横を防ぐ意図があったと推察される。ゆえに家老を介した文書の授受が行われていたと推測できる。

（3）情報の蓄積

南家では石塚・今宮一件に関わる文書が纏まって残されている一方で、宗家・北家の文書群に本一件に関わる文書は残されていない。また、西家では書状と留書の計7点が残されている⁴⁴⁾。本項では、前項で明らかにした苗字衆間での文書授受を前提として、各家の情報蓄積とその利用について検討する。

南家では、前項で紹介したように他苗字衆からの書状は本藩家老を通じて伝達され、その写を作成していた。目録によれば「佐竹南家文書」の特徴として書状形式の史料が極めて多い点が挙げられ、実際に小項目「石塚市正・今宮大学一件」に含まれる85点も大部分が書状形式の史料から成る。前項で紹介した22K526-1～5に写し取られた文書と、「佐竹南家文書」に残る書状について内容や年月日等を照合した結果、南家では授受した書状の写を作成した他に書状の原文書も保管していたことが明らかになった。

例えば、22K526-1の①家老御用状写は、22K732「書状、貴殿へ佐竹東家佐竹山城義智・次男将監殿義路より急段申達せらる御用これ有る旨申聞かされ、御用状を指越すので、左様御心得なさるべきに付」として、②佐竹山城・将監から佐竹兵馬に宛てた書状の写は、22K755-2「書状、石塚市正・今宮大学御科之儀、御自筆並びに主計よりの御用状に相見える通り故、貴殿・大和へは御相談に及ばず相決め申渡すなどに付」として原文書が残されている。これらの他にも、22K526-1～5で写が取られている書状の原文書と思われるものが複数確認できる。

また、22K526-1の④藩主の「御自筆御書付」の写、⑤石塚市正の罪科申渡書の写、⑥今宮大学の罪科申渡書の写は、「佐竹西家文書」においても「御自筆御書附写」、「今宮大学罪科申渡書」、「石塚市正罪科申渡書」として確認できる⁴⁵⁾。

石塚・今宮一件に関して、久保田城下や江戸屋敷で藩政の中心となっていた東家や北家、宗家の文書群に史料が残されていない一方で、在所に留まることの多かった南家と西家に史料がまとまって残されている理由はどこにあるのだろうか。

国元の苗字衆4家のうち、宝暦期から寛政期にかけて藩政に積極的に参加したのは城下に定住する東家と、藩主との血縁の紐帯が強く、藩主からの要請で一定期間城下に滞在していた北家であった⁴⁶⁾。だが、南家・西家で関連文書を一括して蓄積していた。

44) 佐竹西家文書 史料番号 AO312-37「御用ニ付久保田江出府万留書」、AO312-88「主計より御用状写并指控口上書写」、AO312-96-1「御自筆御書附写」、AO312-96-2「佐竹将監・佐竹山城連署書状」、AO312-96-3「某書状」、AO312-96-4「今宮大学罪科申渡書」、AO312-96-5「石塚市正罪科申渡書」。

45) 前掲註44。

46) 幼年の藩主が国入りを果たすまでは、久保田城下に出府して藩政を支えるように藩主から乞われ、佐竹主計義邦・佐竹河内義躬が父子共に宝暦8年9月から明和2年10月まで久保田屋敷に滞在して

これは久保田で家老や北家・東家が中心となっていて行われる政治運営の様子を在所においても把握し、場合によっては町送をもって意見を述べるためであったことを推察される⁴⁷⁾。苗字衆各家の当主らは「苗字衆」という集団として藩政に参与しており、久保田城下から離れた在所にあって情報も把握する必要があったのである。そして、在所の苗字衆と藩政を繋ぐ存在が東家と国元家老であった。特に藩主不在時や幼年藩主の際には、藩政運営に参与するという苗字衆独自の政治的役割を果たした。ゆえに、久保田城下での政治に関連する文書が、在所の苗字衆各家に蓄積され史料群に残されていると考えられる。

おわりに

本論文は「史料空間」という作業概念を用いて、文書が作成授受される過程とその機能を明らかにすることを目的に、久保田藩苗字衆各家の文書群に含まれる史料や藩の部類記録である『国典類抄』を用いて分析を行った。分析の結果、本藩からの文書は、藩家老や藩から派遣される上使、各苗字衆家の久保田屋敷詰の家臣である屋敷番を介して、苗字衆の各知行地に伝わり、苗字衆各家から家中・組下に伝達されるまでの経過と、その経過に伴う文書の機能転化（再構築）の実態を明らかにしてきた。また、宝暦-明和期について検討することで苗字衆各家での情報蓄積と文書授受には、久保田藩苗字衆独自の政治的役割が関係していたことを論じてきた。

第1節では、苗字衆の特徴と、各家に残る文書群の概要と特徴について述べた。久保田藩苗字衆の特徴として、所預として江戸時代を通して知行地支配を行っていた点、本藩家臣（組下）が苗字衆各家の知行地に駐在する点、藩の役職に就任せず藩主不在時には城下で藩政運営に関わる点が挙げられる。そして、各家の文書群にも久保田藩苗字衆特有の統治体制の構造が反映されている。例えば、「佐竹北家文書」、「佐竹西家文書」には本藩や藩主の意を伝える上意下達文書が多く含まれており、藩は所預でもある苗字衆3家に対して法令や政策を正確に伝達する必要があった。そして、苗字衆は各家で写を作成した。そのため現在各家の文書群に上意下達文書が多く残されているという関係性である。

第2節では、上意下達文書を多く含むという「佐竹西家文書」、「佐竹北家文書」の特徴を前提に、藩の最高法令である「御条目」の伝達過程について明らかにした。先行研究では江戸藩邸における伝達方法に触れられることはなかったが、検討により江戸藩邸と国元では出席者の身分階層や人数が異なることが明らかになった。江戸藩邸・国元での「御条目」伝達には家臣団の行為や座列には身分秩序が顕著に現れており、「御条目」の伝達は家臣団の秩序の維持・強化として機能したのではないかと推察した。

第3節では、機能が転化することなく苗字衆の家中・組下レベルまで伝達された第2節の「御条目」に対比して、伝達の過程で法令の機能が転化する事例として郡奉行設置に関わる寛政7年（1795）の「被仰渡」を分析した。その結果、苗字衆の各家には屋敷番を通して本藩からの「被仰渡」が伝達された後、家中での検討や本藩への伺が行われた。そして、検討や伺を経て情報を加筆・修正した「覚」として家中・組下へ共有させた。基本方針を示す「被仰渡」が、家中

いる（「須藤部茂孟大番組頭勤中日記」宝暦8年9月9日条、「知虎日記」明和2年10月10日条）。

47) 久保田藩では伝馬の宿駅間の継立を町送と呼んでいる（ジャパナレッジ版『国史大辞典』）。

や本藩との検討を経ることで、「覚」というより具体的で実務に即した方針を示すものに機能が転化したことが解明された。

第4節では苗字衆間の情報共有とその蓄積について、明和元年（1764）の「石塚・今宮罪科一件」を事例に分析し、苗字衆同士の文書の授受には江戸藩邸、国元を問わず本藩家老が仲介をしていたことを示した。そして在所の苗字衆（南家・西家）に対しては、久保田城下に定住する東家が本藩家老を通して、江戸出府中の北家との間で交わした書状を各家に共有した。

このようにして各家に共有された情報は、各家で写が作成されるなどして蓄積されていった。特に南家では書状の原文書を保管した他に写が作成されていた。その背景には、藩主不在時には在所から久保田に出府し城下で藩政補佐を行う、という苗字衆独自の政治的役割があると推察される。特に在所の苗字衆は、久保田での藩政の様子を東家や本藩家老を通して把握しておく必要があったのである。

このような成果の一方で、本論文では宝暦-明和期と寛政期の個別事例に即した分析を行ったため、文書の伝達方法やその機能について通時的観点からの考察が叶わなかった。この点が今後の課題である。特に、久保田藩の苗字衆は時の藩主との血縁関係や、藩の政治方針などに関連して藩政との関わり方は常に変動している。そのため、対象とする年代の幅を広げ、事例検討を積み重ねてゆくことで苗字衆の藩政への関わり方と情報蓄積の相関性を明らかにしたい。

また、本論文では文書の作成授受の過程と、情報が苗字衆の各家に蓄積される過程を中心に分析した。しかし、蓄積された文書がどのように管理保管されたのか、という文書管理のあり方については現段階では明らかになっていない。自治体史では苗字衆の家政機構について、ほとんど本藩のものに倣っていたと説明されているが、文書管理を担う役職の具体的な職務内容や文書管理の方針などについては明らかになっていない⁴⁸⁾。そのため、引き続き久保田藩苗字衆を対象として各家に蓄積された情報がどのように管理保管されたのか、という「史料空間」のうち物理的な「場」（存在空間）の観点から史料認識をさらに深めてゆきたい。

48) 大館市史編さん委員会『大館市史第2巻』大館市、1978年。

付表 「宝暦-天明期における御条目一覧」（『国典類抄』第18巻、19巻をもとに作成）。

年代	呼称と内容	出席者	場所	出典
宝暦元 12.17	御条目。 俵約、風俗取扱について。	佐竹主殿義智（東家当主）・国元家老・引渡・回座・御相手番・御番頭・御物頭・町方の諸士・兩奉行（勘定奉行・町奉行）・御目付・御用達・諸役・右筆筆頭	国元 御広間、大盤 若之間	「後藤七右衛門祐 良御勘定奉行勤 中日記」
宝暦 2 1.17	御条目。 宝暦元年12月17日に国元で仰 せ渡された御条目。	江戸詰家老・諸頭・右筆	江戸 御広座敷	「御右筆所御書物 江戸御日記」
〳.10.25	御条目。 俵約について。	—	国元 御用所	「石井庄左衛門忠 運御台所役勤中 日記」
宝暦 4 7.11	御書付。 俵約について。	江戸詰家老・近進並以上の者	国元 御広座敷	「後藤七右衛門祐 良御勘定奉行勤 中日記」
〳.9.12	御省略之御書付。	江戸詰家老・御相手番・御番頭・寺社奉行・引渡無役・回座無役・財用奉行・町奉行・勘定奉行・御用人・御膳番・御留守居・御物頭・御目付・御刀番・御納戸役・切支丹改役・御用達。	江戸 御座之間	「小田野又八郎正 武御家老勤中日 記」
〳.10.11	御条目。 財政難につき銀札遣い開始の 旨。	佐竹主殿義智・家老・引渡・回座・御用達・町方からの諸士・右筆筆頭	国元 御広間	「山方助八郎憲自 日記」
宝暦 7 7.7	御条目。 銀札仕法の停止について。	佐竹図書義邦（北家当主）・佐竹大和義村（西家当主）・佐竹山城義智・家老・御相手番・引渡・回座・右筆・寺社奉行・御番頭・側兩役（御膳番・御刀番）・町方から2名宛	国元 御広間、大盤 若之間	「後藤七右衛門祐 良御勘定奉行勤 中日記」
〳.7.19	御条目。 宝暦7年7月7日に国元で仰 せ渡された御条目。 銀札仕法の停止について。	江戸詰家老・本方奉行・副役・右筆筆頭・「交代定居共無残罷出」	江戸 御広座敷	「須藤部茂孟大番 組頭勤中日記」
〳.12.13	御条目。 財政難につき借上。	佐竹山城義智・家老・御相手番・御番頭・引渡・回座・町々から2名宛・右筆筆頭	国元 御広間	「後藤七右衛門祐 良御勘定奉行勤 中日記」
宝暦 8 8.7	御条目。 主君幼年につき壱岐守へ相談 をすること。	「例之通御列座」	国元 大盤 若 之 間 (諸頭・町方)	「後藤七右衛門祐 良御勘定奉行勤 中日記」
〳.8.29	上意之御書付。 宝暦8年8月7日に国元で仰 せ渡された御条目。	江戸詰家老・財用奉行・副役・右筆・「御家中面々」	江戸 御広座敷	「御右筆所御書物 江戸御日記」
〳.12.25	御条目。 俵約について。	江戸詰家老・本方奉行・副役・右筆筆頭・頭役・1役1人宛	江戸 御広座敷	「御右筆所御書物 江戸御日記」
宝暦13 5.11	御条目。 將軍へのお目見えが済んだた め、御直政をする旨。	佐竹山城義智・佐竹主計義邦・家老・御相手番	国元 御広間	「御右筆所御書物 江戸御日記」
明和元 10.21	御条目。 俵約について。	佐竹主計義智・江戸詰家老・近進並以上の者	江戸 御座之間	「須藤部茂孟御目 付勤中日記」
〳.11.17	御条目。 明和元年10月21日に江戸で仰 せ渡された御条目。 俵約について。	佐竹将監義路・家老・能代奉行・三奉行（町奉行・勘定奉行・本方奉行）・副役・御側回・佐竹河内義村・「御座辺之面々」・諸頭・町方から2人宛・右筆筆頭	国元 御広間	「石井忠運御本方 奉行勤中日記」
明和 2 3.5	御書付。 入部費用が乏しいため費用調 達に尽力すべく旨。	—	江戸 御座之間	「岡本又太郎元貴 御家老勤中日記」
〳.3.28	御書付。 明和2年3月5日に江戸で仰 せ渡された御書付。	家老・右筆・副役	国元 御広間	「岡本又太郎元貴 御家老勤中日記」

年代	呼称と内容	出席者	場所	出典
㊦.9.16	御自筆御書付 財政難につき格別の改革を実施する旨。	家老・引渡・回座・諸頭・御刀番・町方から 2人宛。	国元 御広間	「岡本又太郎元貴 御家老勤中日記」
㊦.12.23	上意之覚 重き儉約の仕法に尽力すべき 旨。	—	国元 御広間	「茂孟御鷹方御刀 番勤中日記」
㊦.12.28	御自筆御書付 明和2年12月23日に国元で仰 せ渡された「上意之覚」。	江戸詰家老・表方勝手方役人・三屋敷の諸 士・副役・右筆・近進並以上之面々	江戸 御座之間	「御右筆処御書物 江戸御日記」
明和3 8.22	御条目。 饗宴で物入りのため知行高借 上を行う旨。	家老・右筆筆頭・副役	国元 御広間	「茂孟御鷹方御刀 番勤中日記」
明和4 11.11	御条目。 御用銀の仰せ付け。	佐竹淡路義以（南家当主）・佐竹将監義路・佐 竹右膳義休・家老・御相手番・御用所役人・ 有徳之百姓・有徳之町人	国元 御広間	「茂孟御鷹方御刀 番勤中日記」
㊦.12.8	覚。 財政難につき、意見のある者 は申し出るべき旨。	家老・右筆・副役・三屋敷からの諸士	江戸 御広座敷	「御右筆処御書物 江戸御日記」
明和5 3.12	御条目。 財政難につき、忠義を果たす べき家柄の者は勿論重役の者 を始め家中全体で励むこと。	佐竹淡路義以・佐竹将監義路・家老・右筆筆 頭	国元 御座敷	「宇留野源兵衛勝 富大小姓御番頭 勤中日記」
㊦.4.2	御書付。 明和5年3月12日に国元で仰 せ渡された御条目。	家老・御番頭・表方勝手方役人・副役・右筆・ 近進並以上の面々	江戸 御広座敷	「御右筆処御書物 江戸御日記」
㊦.7.13	御条目。 財政難につき江戸藩邸役人の 手当が滞っている件につい て。	—	江戸 御座之間	「土屋弥五右衛門 知虎寺社奉行動 中日記」
安永元 4.3	御自筆御書付。 質素儉約について。	家老・無役引渡・無役回座・町方から2人宛・ 御刀番・御副役	国元 御広間	「土屋弥五右衛門 知虎御家老勤中 日記」
㊦.4.20	御書付。 安永元年4月3日に仰せ渡し た内容について追加の仰せ渡 し。	引渡・回座を始め役がある者・大番組頭・右 筆・医者・相手番・家老・無役回座・無役引 渡・切支丹改役・御側方	国元 御座之間	「塩谷伯耆久綱御 家老勤中日記」
安永4 7.晦	御条目。 家中の知行高割合について。	佐竹山城義路・家老・御相手番・引渡・回座・ 諸役人・町役人等・右筆筆頭・副役	国元 御広間	「岡本又太郎元貴 御家老勤中日記」
天明元 8.14	御直書。 足輕の給銀について。	家老・引渡・回座・諸役頭・町方から2人宛・ 御刀番・御副役	国元 御広間	「茂孟日記」
天明4 5.3	御直筆御書付。 財政難で仕送りが絶えている 旨。	家老・本方奉行・副役・御物頭・御目付・御 刀番・表方頭役・諸士一同	江戸 御座之間	「御右筆処御書物 江戸御日記」

註) ・—は史料中に記載がないもの。
・「御条目」以外に「御書付」、「御自筆御書付」、「上意之覚」等と呼称されているものも含む。